

なごみのトイレや楽しい階段壁画で 自力で頑張る意欲を引き出す



風のそよぐり声がさわやかな東の国産トイレ。こまめな掃除で徹底的に清潔にしたところ、使う人も汚さなくなり、利用結果で常に気持ちよく使える状態に

井野病院

KEY WORD

床の間付きトイレ



DATA (平成13年10月現在)

- 所在地：兵庫県姫路市
- 創設：平成元年
- 病床数：100床 ●外来患者数：300人(1日平均)
- 診療科：内科、外科、整形外科、眼科、リウマチ科など9科
- 職員数：医師11人、看護婦(士)40人、准看護婦(士)15人、薬剤師3人、管理栄養士2人、診療放射線技師3人、臨床工学技士3人、相談員1人、看護助手10人、他

排泄は“安らぎのひとつ”。でもあり、孤独な思索のときでもある…。この究極のプライバシーを大切にしたいから、トイレは気持ちよくくつろげる空間であってほしい。誰もが抱くそんな望みに近年ようやく光が当てられ、飲食店や公共施設でも快適で個性的なトイレに出会うようになった。このトイレ革命から取り残されてきた医療界で、いち早く名乗りを上げたのが、姫路市の井野病院だ。

同病院の病棟には、床の間付きのトイレがある。車椅子でも無理なく動けるゆったりした広さで、床の間に小さな掛け軸と一輪挿し。その落ち着いた雰囲気は患者に日々、人間としての尊厳を確認させ、回復への意欲を高めているようだ。井野節子事務局長は、「遠くまで行きたくなる

ようなトイレ」というコンセプトでデザインしたのですが、実際、ポータブルトイレをやめてここを使えるようになった患者さんが何人かいます」と話す。

一方、院内2カ所にある階段には、この夏、大木や海の中を描いた壁画が完成した。こちらも、エレベーターではなく階段を使うというリハビリの楽しみを作り出している。

排泄にもなごみを、階段の上り下りには胸躍る楽しさを。従来、効率最優先の病院経営の下で排除されてきたこれらの“遊び”。ここでは「自力で頑張ってみよう」という意欲を引き出す治療のツールになっている。ユーモアとゆとりによる癒しを試行し始めた同病院を訪ねた。



井野節子事務局長は理事長兼院長・隆弘氏の奥様で、現在、神戸大学経済学部の3年生。大学で学んだことは即スタッフにフィードバックするという



トイレは病棟中央にあるために窓がない。そこで曇り窓やスタンドグラスと照明を組み合わせたなど、光が差し込む雰囲気を作り出している



和の雰囲気あふれるトイレとは対照的な、小洒落た洋風のトイレも作った

院長の強い要望で設けられた男子小用便器は、イブ・サンローランのデザインだ



QOL維持のため トイレへ誘導

井野病院の病棟中央にある「癒しのトイレ」の引き戸を開けると、さわやかな鳥のさえずりが聞こえてくる。終日、有線放送を流しているのだ。間接照明の柔らかな光、木の風合いを生かした鏡や床の間は、まるで高級旅館か料亭のよう。こうした純和風の空間でも、便器はやはり患者にとって使いやすい洋式が採用されている。

昨年12月のトイレ大改築で完成した個室は全部で6つ。そのうち床の間付きは2つある。それよりやや狭いが車椅子でも入ることができて障子窓のあるタイプが2つ、残るもう2つは小洒落た洋風に仕上げられている。限られたスペースの中で十分な広さを確保するため、いずれも男女兼用とし、これらとは別に男子小用便器も1つ設けてある。

トイレにこだわる理由について、井野事務局長は、「歳をとって体の自由がきかなくなっても、食事と排泄さえ自分でできれば最小限のQOLが維持でき、本人も幸せでいられる」と説明する。その「確信」は、3年前に病院の隣に老人保健施設を開設してからとくに強くなった。寝たきりに近い状態で病院から移って



南階段の壁面には、1階から4階まで伸びる大木をメインに、小動物や人間の営みが描かれている。変化を楽しみながら一段ずつ楽しく上り下りできる



老人保健施設「しおさきヴィラ」は、井野病院と隣りでつながっている。ラウンジは、骨董風の調度品や絵画で和の落ち着いた雰囲気を醸し出している



学生一人ひとりの自由な発想に任せたスペースには執事様の絵も。患者には「きれい」と好評



家並みや人々の絵が絵風景だった壁に賑わいを与えている



老健施設の一角に祀られているお地蔵様。「患者の境界を超える絶対的な力を欲しい」と井野事務局長

見舞い客との面会室には畳間があり、家族とのくつろいだひとときを過ごせる



もすぐに自力でトイレに行けるようになり、そこから先は目覚ましく回復するケースが目立つというのだ。

この老健施設「しおさきヴィラ」では、骨董風の調度品やのれん、そしてなぜかお地蔵様など、和のテイストがふんだんに取り入れられている。「長年親しんできた家庭的な雰囲気心が張りを与え、回復を促すのでしよう。同様のことを病院で行うには大規模な改装が必要になってしまうので、自力での排泄に誘導できるよう、まずトイレそのものを工夫したわけです」。患者からの投書箱には「トイレがきれいだと、人間として大事に扱われている気がする」との声も寄せられているという。

壁画の制作過程が入院生活の励みに

井野病院の病棟南側階段の壁面には、1階から4階まで伸びる大木が描かれており、フロアごとに「生命力の赤」「希望が沸く黄色」「安らぎの緑」「知的な青」を基調色とした、小動物や人々の営みなどが繰り広げられている。踊り場に設置されたホワイトボードには、「階段を通るのが楽しくなりました」との書き込みも。北側階段にも、同様に趣向を凝らした壁画がある。

外来受付には患者から贈られたぬいぐるみが並び、子どもを喜ばせている



人間ドックの待ち時間を過ごす部屋は、「非日常」を楽しむような豪華なサロン風になっている



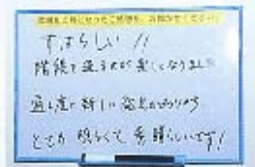
北階段の壁画。海の底、森、銀河などいろいろな風景に見える幻想的なアートが入院生活に潤いをもたらしている



CT室のベッドに横たわると天井には青空の絵が。階段壁画につながる試みの第一歩だった



外来待合室からガラス窓越しに眺められるイギリス風庭園



踊り場のホワイトボードには、「すばらしい」との感想が

レントゲン室への誘導は、味気ないラインではなく動物の楽しい足跡で。途中で少し曲がっているところもご愛敬



外来ロビーには、井野事務局長が北欧で買い込んだ椅子がある。コンパクトな割に座り心地がいいところが気に入ったとか



製作中に、学生が患者に「何か描いてほしいものがあったら言ってく」と声をかける場面もあった。片隅にある燈草の絵はリクエストに応えたもの？



これらは京都造形芸術大学の学生ら16人がボランティアで企画、制作した。制作中の40日間は、若者との交流や作品の進み具合が入院患者の励みとなり、学生側も病気と向き合う人たちとの会話から新たな発想を得たという。

床の間付きのトイレや階段壁画は、「病院には必要ない」「ふさわしくない」という先人観への挑戦ともいえ

る。「アメリカや北欧の病院を視察するうちに、日本の病院にもユーモアが必要だと痛感したのです」と井野事務局長。そこから、レントゲン室への道案内を動物の足跡で示したり、エコー室の天井に蛍光色の星を浮かび上がらせるといった発想が生まれた。楽しい雰囲気や子どもの見舞い客を増やし、院内をさらに活気づけるという効用も生んだ。

「うちのように地方都市の少しはずれにある病院は、ある程度までは何でもカバーし、その先は専門病院に紹介するという役割を担っています」。そのポジショニングにおいては、先進的な医療技術もさることながら、ユーモアやゆとりというブラスアルファの癒しこそが求められている。井野事務局長の言葉からは、地域医療の棲み分けの中で、同病院が担うべき役割についての自覚が伝わってきた。